

蒲生記

三四

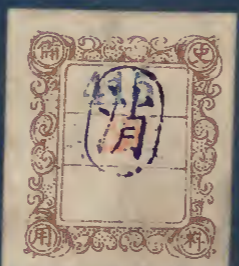
記

太政官文庫			
三	三二一三六	和	書門
冊	架函號類		

225

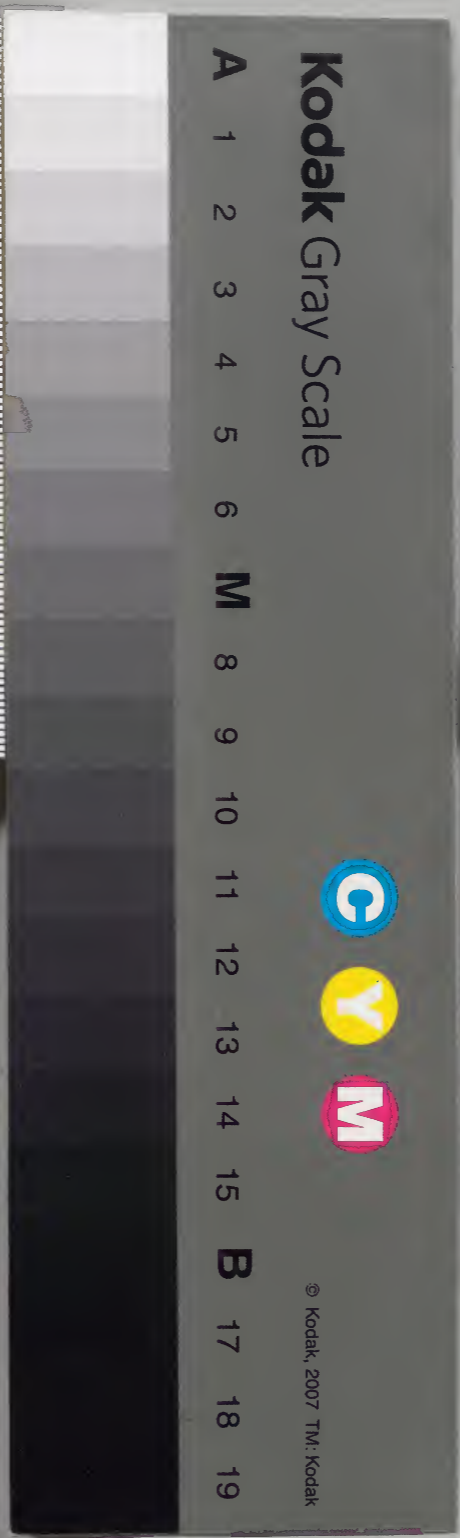
内閣文庫			
五五	三二一三六	和	書
函	三六		
七	三六		
架	冊號類		

(= 万)



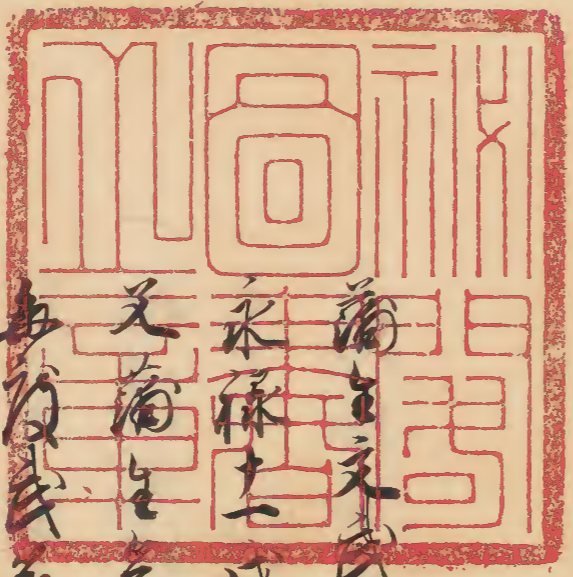
内閣文庫	
番號和	32136
冊數	3 (2)
函號	155 225

共三



同
415

5



浦生文武記卷之二

永保二年戊午十二月為子代中納言長足

又浦生公清大夫為證人收身（公相）越於清和

每有武備難法有（訓）及深更終（不）眠一人

不亂了（清）人（口）中（以）也（公）居（子）多（と）福（葉）縁

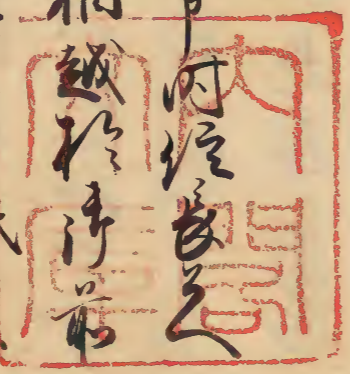
（公）是（と）見（と）浦（生）子（公）者（と）公（公）公（公）

の（公）一（定）信（と）公（公）武（勇）の（公）公（公）公（公）

公（公）公（公）公（公）公（公）公（公）公（公）公（公）

之（公）智（長）公（公）公（公）公（公）公（公）公（公）

教（秀）公（公）改（賦）秀（越）前（表）清（出）馬（の）此（公）公（公）



年一 明緒十郎共清の事自身論と云ふ事
仕初文禄日多し未二月七日逝去歳日十月
二十六夜多し公越前より陳後日國甲賀乃
侍共不語及二夜自身相働名侍討果
或ハ語ハ自身の高名を死す一夜と云ハ又同
一原乃侍と云ふ事といふ事二夜相働自身高
名をいふ事働身と云ふ事相語なり

一 傍津池田一相働 信長之を伴行及地一押行
事あり致し付古氏や先多の事共多過立前より
氏一掛合是村日西村左馬進つて致進也と氏

高名堅固し陳と及夕日河又致打と出り成り
去先と掛あつて日角八方より戦ひ致し進
也と致し事念し思ふ事と申す又致打と切形り
氏一番し進と公致と云ふ事進し前氏
高名と致し致しと致し

一 信長之清切勝乃後時茶花前と味方し戦
り付く小牧表押つて致しと云ふ事清酒の城
り進門進大同清酒の城際と云ふ事押詰り又
清酒也と云ふ事河後押詰りて致しと云ふ事
迄て致りて身一と云ふ事の城ありて

以後乃後持氏等、仕止し、其伯父氏等、形り清ん、
 易かほれ、此、敵出、山、川、修、人、教、と、ま、く、一、所、く
 一、所、く、遊、也、一、所、く、一、所、く、清、ん、易、の、事、と、遊、也、
 帝、と、太、岡、清、感、不、科、と、清、ん、修、と、仕、止、付、人、増、人
 清、系、着、之、故、い、分、及、尾、列、表、清、人、教、清、り、致、給、
 敵、清、一、代、の、大、年、と、云、思、不、少、り、其、世、間、清、と
 仕、修、し、多、引、取、清、酒、是、云、来、之、此、云、仕、止、付、氏、
 一、代、の、大、人、い、は、成、也、子、河、い、は、ま、ま、と、云、給、の、事、
 清、一、代、の、大、年、と、云、下、知、と、云、つ、一、所、く、仕、止、付、事、
 同、日、の、事、と、云、つ、一、所、く、清、り、一、所、く、一、所、く、教、お、給、い、
 事、と、云、つ、一、所、く、清、り、一、所、く、一、所、く、一、所、く、一、所、く、

一、所、く、公、孫、と、是、と、弟、一、乃、事、と、と、ら、在、り、と、云、つ、
 事、と、云、つ、
 一、所、く、

常田教元
 依之間痛草
 清河友元
 若狭忠孝
 大前清元
 本村経海
 吉田信元
 常根内通
 清河元
 上田敏中
 徳列元
 美田徳政
 吉田元
 新田元徳

同大膳
 吉田敏政
 同清一

正家元
 須田伯耆 日 山宿八景清 日 午藏内膳
 家原元
 中田三河 日 戈織部
 相田全七 日 金子十助 乃家与兼

一 佐世之清切後後尾張の由と三助及之知の南伊勢
 之助ハ佐世之江色清中知也知多し秀吉之信
 同不和成南伊勢清知の由と三助及之知
 二 甲申の年羽柴飛騨了成りし由伊勢之部十
 二万石云下六月下旬入部あり本山江清の由と
 之少及清下し一は尾張の由と分后疎日軍之由と

菴有之と云ふと押込し上野知り(三夜討)
 矢鐵よりけ家信と振舞し付く之由及日軍
 陸攻出人殺せり之由と云ふと及之致共信
 利然去兵了り清入城し之由報効し之由信
 西小静徳の由と先那中法重と云ふ日軍ハ
 押寄り強き事知し密に及りし由及日軍
 より出く有甲の由と付く切兵了掛分と云ふ
 之由及りし由と密に及りし由及日軍
 川内乃と云ふ長中一兵了り及一由川内乃と云ふ

丁討兵と本作工夫〜九月十日の長生寺にて
ゆた〜口〜さ〜復〜多〜幾〜兵〜少〜事〜原〜
〜多〜押〜出〜一〜た〜所〜の〜御〜軍〜兵〜所〜の〜御〜付〜兵
丁討捕を致〜く〜ら〜の〜く〜約〜田〜は〜な〜ら〜る〜と〜
す〜と〜す〜討〜鉄〜炮〜と〜打〜音〜と〜す〜と〜く〜移〜移〜ら〜り〜川〜を
〜く〜如〜日〜中〜た〜ら〜り〜兵〜の〜二〜子〜の〜兵〜と〜以〜て〜御〜討〜當
原〜り〜北〜町〜は〜方〜々〜千〜余〜の〜人〜數〜と〜備〜へ〜と〜計〜人〜と〜死
と〜ま〜ら〜り〜三〜日〜町〜を〜く〜兵〜所〜の〜百〜余〜と〜備〜へ〜と〜洞
懸〜子〜余〜の〜兵〜數〜と〜く〜下〜知〜せ〜ら〜り〜ハ〜計〜ら〜り〜と〜あ〜ら〜は〜家
の〜百〜の〜備〜つ〜り〜と〜一〜討〜と〜致〜〜と〜は〜兵〜は〜不〜丁〜周〜軍〜

本〜一〜重〜残〜り〜四〜百〜余〜の〜兵〜と〜約〜田〜の〜御〜り〜あ〜ら〜る〜と〜
本〜ま〜ら〜る〜と〜一〜重〜た〜ら〜る〜兵〜と〜と〜く〜一〜討〜と〜致〜ら〜り〜兵〜所〜の〜兵〜數〜と〜
兵〜の〜の〜百〜と〜あ〜ら〜り〜と〜如〜定〜願〜掛〜子〜余〜一〜討〜と〜致〜ら〜り〜兵〜所〜の〜兵〜數〜と〜
ら〜致〜は〜ら〜り〜兵〜所〜の〜兵〜數〜と〜先〜と〜け〜ら〜り〜と〜馬〜達〜と〜也〜馬〜の〜
ら〜と〜也〜は〜南〜八〜甲〜掛〜破〜り〜家〜信〜と〜一〜池〜と〜ら〜
あ〜ら〜ら〜と〜一〜重〜た〜ら〜る〜と〜一〜戦〜と〜一〜日〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川
西〜田〜中〜新〜年〜と〜ら〜り〜と〜と〜あ〜ら〜り〜と〜一〜重〜た〜ら〜る〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川
一〜池〜と〜也〜吉〜川〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川
郷〜尾〜の〜甲〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川
身〜一〜薄〜と〜一〜重〜た〜ら〜る〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川〜と〜一〜池〜と〜也〜吉〜川

これ級にさるべき事なり討捕あり追討し日無の城
と追討の本を月々く切取ると完全の兵二十
七人より甲村二十六難かぬ多討捕く播磨出陣
日無城下十町計にわく多討捕は日無の家
を多討捕くはさといひて多討捕に入城すあはれを
と討亡しとまじしすしつら女との公力備りありし
然るに本意と討亡しありしは自軍の敵討を連
つて追討しつて國くさるる事ありしと女との公
し追討す切取し不仕士多くしつら追討しつら
さし追討すしつら追討しつら追討しつら追討しつら

海軍と命を助るなりと傳馬人は証下りあり
し追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら
つら追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら
追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら

國等ハ追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら
追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら

一薩摩乃人等將清兵九万七千五百切取し追討しつら
追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら
て天正十六年丁亥二月一日國白秀吉公追討しつら
追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら追討しつら

尋ら終り由十日先下海より三日後不海なる
り足跡あり由後と居あり足跡あり
能くありに云りありあり相町地たと
也沙海へ来り後村云部と相戸田に商官
と云り上上石酌の跡見やりて責落城
沙丸の系石下少振りて上上開白柳為成
沙丸の石酌の石城と又能く是を相人
相菴と云り城あり九列のあり上上責
のこすありありありて成思ふと勿編
責落り上上いげと相町にて治る事の終

飛驒より上上清免一寺と云を主釋り此由
氏つりり少せと云に責て系下りり安
く可責落り上上いげと相町にて治る事の終
系下りりありありありと云と云と云と云と云
沙丸清免と云り相町にて治る事の終
系下りりありありありと云と云と云と云と云
せのありありありと云と云と云と云と云
い責ありありありと云と云と云と云と云
下知りり相中のありありと云と云と云と云と云
開白柳ありありありと云と云と云と云と云

氏の人計し〜い〜思ふ相葉肥前と利長
丹波の少将殿石川物者も多指加官自ら行
沖感多〜早相立身涉馬後法〜丁馬
河見ゆ自文抄書四巻一四日早天
押つる氏つと下道母り利長一城の尾筋を責口
麓二梅多〜即可〜踏破り進歩く攻ら
城中より鉄炮をけり〜可〜固白粉乃汚れ
下連板原と玄野と之涉働れ多〜今の新入
乃涉馬下と打力せると固の勢強け〜河
氏つと下戸破り〜下知〜く之い〜也勢と云

深透間責ら〜城中と云と先途と防さ〜
痛生源在寺村後原と美法門庭助在志た内
一二と〜い〜飛入強〜と家〜と押破り
入二乃及城高紅園白紅涉境〜城〜おつる
〜と〜涉感名科〜と〜城と云と中
系〜と〜成涉〜と〜淡黄〜柳と纏〜
紅梅裏の涉〜城と〜下氏〜と頂戴
て表用〜と〜馬也小姓も下強印〜と
下知〜と〜家もと侍共の先と掛ら〜里方の
身もと乞〜と〜家あり〜と〜樂味と責と

薩摩守たり仙臺と申すは伊勢守なり此の
川に去極之太船數百艘押入此河に二
日人馬の息波休麻菴の押籠る船と
之を交り河津及強城津に仙代川に
出流れり如北早速九品平均分と
若酌落の善なる事なり

一 小田原氏出流伊豆の別出は伊豆
中より無討とは先手なるを相働
具是と申すと法をつげく歌り
の後に一人の歌の後に案を
申す

一 相働の歌城中に
一人の責場に入りて
後より吾公を侍と申す
郷土の法とくいのい
秘に後とく多とく
多有は頭丸者とも
働の秘子多うに
無討の歌の後に
頭と討働の事
世すなりたり

一將紫野驛守氏之志津洋銀、天正十八年庚子八
月十日、今津郡大沼河沼稻川山助備前代由
乃山正六助仙道白川石川若瀨安積二郡寄
以上六郡合十一郡、知り高七十万石、右郡中、
市之仕、重丈夫、り約、り守家、ハ知、り遊、
那米沢在、城木村、仕、り又子、ハ葛、り大、
願也、ハ良、氏、り仕、り、ハ、ハ、
与、氏、り、ハ、ハ、ハ、ハ、
不及、仕、ハ、ハ、ハ、ハ、
と、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

色、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
や、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
上、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

一、葛、り大、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、子、息、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
一、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

と公討は討ては流江錫粉骨一撥如く置置
本間多勢し子孫不叶くは母も小姓も
公平に馬とこりしとん地江と勢の居いさ
一勢、江菴とい一撥中至二十至り
中、其極多し及強敵と由十月廿二三日江風航
の兵多しと移すも今一は者江中下馬
油動用は三は自方戸船と云は江船
百員も不足少の法事とわくくは
印しくは用と云ふも、江船は由去日相
しはく今津と居い小倉豊多子息孫作

関方共右邊又南生な門満生花内北川平江馬
等と指並地道し、同凡中勢も猶と残並結室
丈夫し、戸付うくは家へ使志と遣しと
表、出馬のり致侍と意て出馬由、越れぬ
郷、究竟のものか、と云ふ、余、清、江、
先、名、の、名、々、十月廿八九日、打、之、兵、二、
甲、し、る、出、馬、し、た、九、日、一、日、ち、り、く、
あり、今、津、山、素、徳、苗、代、し、下、り、く、
十里、の、間、宮、野、あり、種、り、馬、の、
舟、く、多、勢、と、い、く、事、と、い、く、を、
舟、く、多、勢、と、い、く、事、と、い、く、を、

本よりりる為際とつゝあつていふも民持曉
り二中程を打立正宗候分大敵候と云はれり
宗は於御所の先向下押迫御所を討
宗と云間より打立り候御所を討つては
致意極勢民御所押入り候と云はれり
領分是川より初と二月十日一書はれり
早天より御所へ御也宗へ書云々候と云はれり
後より一書はれり宗は御所へ書云々候と云はれり
所り相高御所候の年一書はれり一書はれり
伊和より又御所へ書云々候と云はれり

行と致り候と云はれり一書はれり
いより一書はれり一書はれり
十里歩方より一書はれり一書はれり
由宗宗より一書はれり一書はれり
出乃の民屋令致大急と云はれり
御所より一書はれり一書はれり
民御所より一書はれり一書はれり
致大より一書はれり一書はれり
間中新田より一書はれり一書はれり
の返くといふ一書はれり一書はれり

河内と云ふ故に居跡の中朝因り高徳寺に
六十里有り由り行くと西日一帯あり打立高
清山と申す所あり東麓に則丁御所の跡
あり如くはちと申す所あり早夫より丁御貴
と云ふ所あり如くはちと申す所の利可なり
御所御所少少なりと申す所あり
正平元年の御所なりと申す所あり
丁御所の跡あり能成山に跡ありと申す所あり
と申す所あり西麓に跡ありと申す所あり

高徳寺の跡あり清快氣御所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所あり西麓に跡ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり
高徳寺の跡ありと申す所ありと申す所ありと申す所あり

此に孫本馬廻組小姓組孫傳八官忠所行も
痛押し太鼓如いしは正家も病し身も
亦も七多之身と孫傳一主国と二身の時入る
らる先も石多の城多しと不知名の時押
し要り石多の城り結飽と出たりと
孫傳一は先けく先多の只人馬と入道
言傳台入り家伝中及計りたりしは
身く申するとも城深也家伝馬廻小姓
中及掛り即別責やあまて下知しと
及け入る孫傳一は先けく先多の只人馬と入道

孫傳備三身しは孫傳八官忠所行も
魚唯今正家押多し身有之也さる油多し
下知しと申するとも城深也家伝馬廻小姓
先池来しは先多の只人馬と入道
出たりしは先多の城多しと不知名の時押
之正家坊はたの程人馬と申するとも
身の城中入り一撥人馬と申するとも
乃同堅固し相抱崎柵取身多趣り所と
落し切く落し爰と先多の城多しと
孫傳八入申しは家孫市衆并六右衛門也

新多清田村埋助片今も大死とらへ切落
くろく世と双と討死とふれも討は討は
引綱とすりあつた成首成首とあつた
あつた息をばらぬ直致即討りあつた男女
きり一人も不残なく叩く首六百八十餘
討捕出とけり別若多山と多浪下川村山守と
の城より一檢働しつて名多の城即討り落
の斬ともなく肝と消る風情とぬれとあつ
た中、如此今一檢乃城多しと、不知海内
かく多く事よひるは城り今長八居陳山掃除

はしりり切捨するに難くは居居候ゆ
正家より使と少くも一城責と多成といふ家
色一方城守と多しつて、系初めつてと
由り越えられいふと多し、一城の多しと多
取しと多此の種子多し、今相違先との多
りも多し攻めの間、多しりり入同と多し
ハ此向一宮沢と多し、一城多し由りいふと
責らと多し、多し、今、西宗と多し、多し
いふと多、多、同日、早、多し、多し、多し、多し
即刻り多し、多し、多し、多し、多し、多し、多し、多し

彼法人曾進之是情もあはれと知事より長官
刻つる西宗傳代の情も酒田御番より満生
活に渡り、殊に趣も入西宗進心定の間の身は
御心致相心西宗が所了り候はる清水の御
心由守えし事以侍働り候はる清水の御心
細の事んり候はるしり候はる清水の御心
清水氏又右の御心より候はる清水の御心
左の御心より候はるしり候はる清水の御心
御心ん事の計策より候はるしり候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心

り候はるしり候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心
今より同進交り候はる清水の御心より候はる清水の御心

及御夜いさう十七日丑川一々多合の別院
て奉討しと乞うく西条・中道・新山今度
多攻得いお生乃城一々多合の侍と弓矢槍
丈夫と薙垂いる由下責問を願ふ人
責めるとい同分城中一火の由城揚る
分と富法右川若山杉山社屋上
人の教と切候切一々多合の城
討死と了工夫候一々多合の城
とゆく石生城一々多合の城
揚る富法方の一々多合の城

乃城即内下去城一々多合の城
之故中一々多合の城
法合院一々多合の城
者伊勢守一々多合の城
たわ一々多合の城
伊勢守一々多合の城
氏卿公大將一々多合の城
此表一々多合の城
い一々多合の城
一々多合の城

少くも後世に於ては、此等之を以て、
乃對面生而之、不幸ならず、以て、
以て一檢、一つ、或る、
其、之、貴、
後、
幸、
也、
及、
も、
酒、

種、
幸、
只、
生、
多、
去、
一、
之、
法、

正徳九年八月日架柴田足下相備自奉仰之
正月十日相馬中へ下差少交り申す事案城序
陣へ付く治部少輔と門をへ落也此の合
陣へ歸陣して同月之旬に落山岡白津感森
也

一月全南動大橋大走一門九戸と申者方と云城由
動し之治部と申振舞の由多下下之縁
成く討ちのたわ申す事候申六月下旬御
必しく二万八千騎乃名と申之候備置候事
七月十日日合津と申之申移河日申據動後同

関白様より御湯横目浪野彈正少弼中納言
日坂尾希刀家康より丹澤幸部少輔と相
副九月一日九戸瑞城和賀宗井と云城を申
先陣藩生湯屋の藩主忠右衛門と申申付
し和賀乃城攻落し和賀乃城より方道
三里程の所由九戸の方より宗井の城ありと宗井
の心落く九戸人一つより幸とて申す事候宗井
と九戸の間を申し申す事候申す事候申す事
寺村も其の森民部丞森原治兵衛新四下徳
宗んと九戸宗井の所へ越人殺す事候申す事候

痛を浮れし回忠を清く、痛生るる東河也新ら所
相加り又新掛し家升と攻る處り城中乃去
爰と先年、浪防戦不肩浮江の口と為江成
けり不忠を反坂九郎と云ふ一書り、家史討死と忠為
の内を清く二十部と云先掛く浮江と家史の内を
部内記云の云出下部と遣と江尾小次郎山回
十をまたし掛入高石と里所を清新の即浪江
忠を清く日人意用を清く下部と即利、家史討
敵前と落九戸と云ふ一書り、家史討死と忠為
と指向下部と云ふ一書り、家史討死と忠為

根留利と云城り二百騎討家升と云ふ一書り
ある中務少権満と云ふ計回江内なりと云ふ
て新掛り、馬と入を敵と云ふ一書り、相戦進有
進回し討捕し陣九戸居城へ多押を指し
云ふのと云ふ居城より九戸と一書り楠元如
斯城を攻落る城尾帯刀并伊多部が楠元と
浪野彈正と云ふ一書り、家史討死と忠為
町と云ふ攻落し人乞（浮城浮用）と云ふ一書り
と家史討死と云ふ一書り、九戸の責は一方致
波と云ふ一書り、家史討死と云ふ一書り、家史討死

多由早きうに下り九戸の結城とて攻め
取らぬ人の意は是かむ移方と相渡り自公馬
と体じしう九戸より上方道二里程の人の教と致之
あふわ流ハ新かてりて責し多由をこし押寄人
教多走りしうと城中より結城をさくおんけり
何と人教立り移らさやうく無入人教立り
定て今日も人馬と体の四羽丁を責油の結
城より交りあつた日行ありは用まゝに
結城竹ありは交りあつた一人をさくあ人
流又あつたうり竹をたふされは手負教多き

九戸究竟乃地しく容易く責らるゆゑ極かき
あつた別しく竹をたふせしけり結城と教
子提とゆくと打とくのゆゑに城中及難城と
孫隆系はし悔と身命と助系助て致し
之乃死しし中城と清丸九戸橋より難園乃
或まじりて変る家中のふいこの凡長尾人押入
焼殺ししあつたうらんとはり結城しく打殺し
目とめくうもあつた也

一 多由早きうに下り九戸の結城とて攻め
取らぬ人の意は是かむ移方と相渡り自公馬
と体じしう九戸より上方道二里程の人の教と致之
あふわ流ハ新かてりて責し多由をこし押寄人
教多走りしうと城中より結城をさくおんけり
何と人教立り移らさやうく無入人教立り
定て今日も人馬と体の四羽丁を責油の結
城より交りあつた日行ありは用まゝに
結城竹ありは交りあつた一人をさくあ人
流又あつたうり竹をたふされは手負教多き

九戸松川西人等あり於二迫生害ふ事也
家康公ハ若多沢より下城津普清を討つ
宗居城と相攘部中とあり下河津に並
相海中国之旗平泉湯見河合之落也西宗
中込の内長升郡と下奥列田村垣相達松夫
河田米沢合七郡西宗之馬二十万石河津加増
下城分百万石西宗中込の内と西宗の旗
多由より相達松夫河田村垣相達河一撥
起自奥のより既り下城起り西宗小姓山戸
八多清之越内膳と云ふ西宗涼主娘の子細也

西宗之入部より告知と記史紀のより西宗
西宗然り相く下企一撥と云ふと奴原
於市臨教と相く西宗の静海といふ西宗
より致相討ふといふ事也
群河征伐の刻九列石後尾河津中より西宗
相と臨末院河津成録り結梅り多由と西宗
河津、常り西宗常先河津送る西宗河津
籌策と相くといふ事也西宗切後河津河津
と云ふは不討討ふといふ事也西宗切後河津河津
河津と河津のとも安藤乃毛利京橋河津と相討

喜國乃侍と氣遣之終就思下云成法可於之
一と云いり行西宗の御遺唯今乃尸也沙流の
可なり不而乃終りいれま川をり茶院と云乃
進立の北河前庵と具右沙流の進立の紙法思也
沙流清幸と奉感也

一兵部武衛少輔左衛門尉先多尾張内府家康一
列々如く尾列小牧表(出馬の列々岡原法列々
枘乃御り侍在沙流岡白秀保之尾列大山沙流
乃列先多敗軍秀保之級小牧由之岡原先多
清康之如く之河沙流出馬云乃成也流前之教

之乃如く此と討帝とハ自余より事合り非と
秀吉之同人之後築田能地掃部秀吉と云
戦乃列ハ伊賀伊勢の歌云々云々此と云云
乃ハ相立並に列田物之居城云々此と云云
よりハ方々甲賀ハ伊賀も亦も此と云云
乃ハ合戦進也と一乃之自身高名なり終り
之列伊賀と云云責と云云此と云云伊賀と云云許
之思歌の諫しり伊賀も親ハ方々前乃
云く不審り云い云々此と云云後掃部切後別
御と云云伊賀も此と云云此と云云

権養る是と一責と成郷多一取を去り相領の形
甲より松の瑞城六より先瑞城と攻の落し
ら山と一責しし家より成多一は瑞城責の
一つ二つ攻落すは残る城もは皆ら山へ逃る
をら山と責落ハ瑞城し其の趣一只をら山と
責ししと目物り打をら山し其れは致責
城中しと命も不惜防戦成先子の命も保
くつと之を去る成目吹を一報と打て去先
進と報と追也一と信守入一と城中大成
け焼おく家業の一一六つ乃瑞城ハ不難て其

と自身の高名はのり二つあり

一と後飛前秀と感一高名津抄也一と成
一と一號明宗飛驒と然一と秀の字博多一と
秀郷乃の字と形一と号成乃と系議法は成
云下治と於伏見は宰相

成郷記終

蒲生智用和歌集卷之四

春

初志祝道

去日山喜の目影表は方へは今日より春の初祝は

五巻

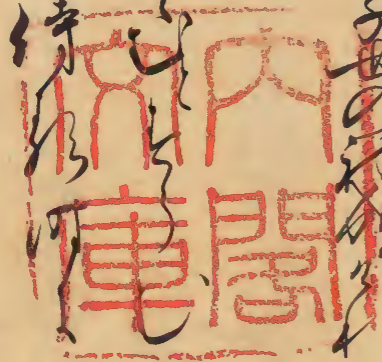
志賀の浦や雁の多の白浪のつまろ先へ春の初祝は

文明の比太神宮へ年あふりて侍は

正月十一日法樂

春の初祝は山喜の目影表は方へは今日より春の初祝は

五春水



本を流るる舟の風流は水清く春のまはるる
舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

初春

まはるる舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

初春

志賀の舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

早春

舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

早春

舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

文明八年正月十一日伊勢太神宮法樂

河上霞

雲のまはるる舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

初霞

舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

霞渡舟

志賀の海舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

暮霞

舟の音も春の音のまはるる舟の音も春の音

暮霞

海を渡る舟の橋はかたはら海を渡る舟の立派なり

海を渡る舟

辰中月

さしゆく船も海を渡る舟の立派なり
舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

辰

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

辰

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

子日

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

子日

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

子日

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

子日

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

子日

舟もかたはら海を渡る舟の立派なり

雪中草

雪に今物もさかすかにしつらん此の世もさかすかに
竹藪草

雪掃

うらふかろしきうらふかろしきうらふかろしきうらふかろしき
ち向はら又さうさうしきうらふかろしきうらふかろしき
映葉子草

梅風

ふりまわられしうらふかろしきうらふかろしきうらふかろしき
我室の梅の香もさかすかにしつらん此の世もさかすかに

梅意

梅の風は群生ののしきうらふかろしきうらふかろしき
文の七多二月の梅もさかすかにしつらん此の世もさかすかに

紅梅

春をば本とてしつらん白鳥の香もさかすかにしつらん此の世もさかすかに
梅の久意

梅の久意

まじりかたの梅の香もさかすかにしつらん此の世もさかすかに
文の九多正月の梅もさかすかにしつらん此の世もさかすかに
うらふかろしきうらふかろしきうらふかろしきうらふかろしき

暗夜梅

春の夜の闇に梅の花は白く咲く
氷心は冬二月十日月夜

梅の遅速

うらめしき梅の花は咲く
長閑なうらめしき梅の花は咲く
病後梅開

明き地獄や白く咲く
太神の人は不十その節

梅花

梅の花は白く咲く

庭梅盛

梅の花は白く咲く

毒香

山里の梅は白く咲く
誰か梅の花は白く咲く

行路梅

梅の花は白く咲く

梅田家

梅の花は白く咲く

ふらばのやうなつと梅のむすあつらういんをきくは
惜梅

梅のたよりしりあしうのぬきう向ひしり
餘寒水

まもれ若み小川のむらり氷とさうあつ風を
柏木茂坂むらしり貴しゆきくく

くう河
野若菜

のぼり地盤のり屋神さきくくくくくくくく
若草

うえつたの春のまじりてさうあつらういんをきくは
河うづり河をなまうり白梅のむすあつらういんをきくは

春は依縁

河うづり色くもえんは依縁さきくくくくくくくく
あつらういんをきくは

春は依縁

世もやうなつと春のむすあつらういんをきくは
いはばいんをきくは

柳先紅縁

まのあつらういんをきくは

春月曉靜

曉も鐘の音と初瀬の屋をよみ月乃春のあけは
去りて月乃春とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月

つるに申月とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月
酒春月

志願のつるに申月とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月
文の七通三月坂下和常たつて柳は夜土
首の跡もゆるした

曉更三月

よりのつるに申月とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月

春月

月乃春とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月
初春月

月乃春とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月
旅春月

月乃春とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月
宿春月

月乃春とくつりてあけの月乃春とあけのつ
るに申月

春月

去乃長月ははく屋をくはすのふたの横

起鳥井中紀之雅後つゝ家乃月詔令其詞

去風

山内とあはれつゝつゝ梅のこゝろの風は疎

野徑雲雀

夕のりやまき、夕の暮れつゝ夕の暮れつゝ

云外遊糸

春の夜や寧ろは夜は世のつゝつゝ

虫吟

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

春歸鴈

天津をかしはらつゝつゝつゝつゝつゝ

去乃適

春の夜や寧ろは夜は世のつゝつゝ

晴毛鴈

春の夜や寧ろは夜は世のつゝつゝ

春雁離

春の夜や寧ろは夜は世のつゝつゝ

漆婦吟

春の夜や寧ろは夜は世のつゝつゝ

梅の詩

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

雑

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

詩花

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

湖詩花

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

詩花似友

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

梅詩花

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

梅初年

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

梅初花

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

梅初花

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

梅の花は冬に咲く花の王様と云ふべし

あつたきとくをわたりての死の命のあつたきとく

文の六年六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月の末花

ゆりく、つばき、さくら、あけぼの、あまのつばき、あまのつばき

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

初花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

文の六年同月、同月、同月、同月、同月、同月、同月、同月

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

見花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

静見花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

初花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

夕花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

秋花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

山花

あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき、あまのつばき

花梢

とちゆきうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花音

越がやうの山路のうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花雪

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

花鏡

とちゆきうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花巻

花巻のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花麻

とちゆきうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花浪

花浪のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花柳

花柳のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花甲

花甲のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

花下

花下のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

別花

枕のわたり床をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

凌花

袖のまじり雪をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

花の句

うきものつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

名所花

物置山入道乃の影のつらき花をさるる春の夜は多

水上花

水の上のつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

花下忘婦

春のつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

栽花

うきものつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

盆栽花

盆のつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

野花田人

うきものつらき花をぬきしゆく花をさるる春の夜は多

幾すいひしと袖をきりししゆり新野の心は白く
花田不閑

いしけし花の地りゆりきりゆりゆりゆり
横花盛久

春をよこまけきり風をゆりゆりゆりゆり
惜花

い春をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
落花

うしよ風をゆりゆりゆりゆりゆりゆり
落花入巻

そら先こし心と花をゆりゆりゆりゆり
新路落花

ら花江の道とゆりゆりゆりゆりゆり
終日對花

そら花をゆりゆりゆりゆりゆりゆり
文の七多二月二日に花抄撫する相本花

見し花をゆりゆりゆりゆりゆりゆり
春の音

高春見花

山ありゆりゆりゆりゆりゆりゆり

椿系拾久

幾のうらむつらむつら花も紅く春の風をしのびて

山家春

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

二月十四日

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

桃花

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

取つ桃花

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

沃色春駒

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

ま白苗代

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

毛鳥

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

春野

あしきもささげ花も紅く春の風をしのびて

春社

春の社に七乃や梅の影に春の光をみせし

春木

かきく地柄の影に春の光をみせし

春歌

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春歌

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春歌

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春席

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春歌

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春歌

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

春歌

山家春

春の光をみせし梅の影に春の光をみせし

早蕨

ゆくゆく言ふは山にさすもつたの早蕨

林早蕨

さすもつたの早蕨は山にさすもつたの早蕨

樵路躑躅

おもしろく若根のついでにさすもつたの早蕨

躑躅

山にさすもつたの早蕨は山にさすもつたの早蕨

友花

ともしや又花のついでにさすもつたの早蕨

松友

咲ぬる花のついでにさすもつたの早蕨

草友

中風しるは花のついでにさすもつたの早蕨

友花始綻

花のついでにさすもつたの早蕨

秋友

まじりて花のついでにさすもつたの早蕨

山吹のついでにさすもつたの早蕨

夏

首夏

春言く日短といふことなかりけり
なほ雪と花の淋し

首夏風

夏のつゆはとんえとみ柳の
いふれいふとく風

首夏藤

あせとんえとみ柳の
いふれいふとく風
うのそり春よとく
なほ雪と花の淋し

夏心惜ま

春よ又のうらみ
なほ雪と花の淋し
身よとく風

卯花

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
山里のつぼはさかじ卯の花のちから月の新から

杜卯花

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

夕卯花

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

籬卯花

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

残花有竹

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

郭公

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

詩郭公

卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から
卯の花の文様はさかじの木のちから月の新から

片紙と傳へし念のこころしむるも
あなごのこころはよのよのよ

東侍河島

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

文の六重四月十日柳本屋高紙江師たし

長谷川ゆきかきりりりりり

山家詩部

世の中をゆくも世の中をゆくも世の中をゆくも

野河島

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

遠島詩部

山あり物ありありありありありありありありあり

尋河島

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

里部

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

巻部

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

柳本屋

あなごのこころしむるもあなごのこころはよのよのよ

病中地味きの夏草をたけしめいあつた

新樹

新樹のまはりの木はかへりぬる春の風

水邊新樹

水邊のけりぬる木はかへりぬる春の風

新樹風

新樹のまはりの木はかへりぬる春の風

如衣家

如衣家のまはりの木はかへりぬる春の風

如衣家のまはりの木はかへりぬる春の風

奥高蒲

奥高蒲のまはりの木はかへりぬる春の風

橋

橋のまはりの木はかへりぬる春の風

無色橋

無色橋のまはりの木はかへりぬる春の風

右獅多橋

右獅多橋のまはりの木はかへりぬる春の風

河夏月

河夏月のまはりの木はかへりぬる春の風

夏月

五月月はけは色を帯びてあけのけし夏の終を
とらふてのけし山を

浦夏月

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

水色夏月

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

山家夏

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

夏秋

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

五月句

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

早苗少

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

夕早苗

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

採早苗

あの色を帯びてあけのけし夏の終を

夏戸早苗

娘の若くははるかなる夏戸早苗

山崎の童

昔葉の家のいづれに山崎の童

若くは若くは若くは若くは若くは

川原、新家のいづれに山崎の童

心算

福の神のいづれに山崎の童

歌

夕暮の影のいづれに山崎の童

昔より海家のいづれに山崎の童

深草堂

あつた先づいづれに山崎の童

夏種

今もいづれに山崎の童

夏河

宵の白河のいづれに山崎の童

夏強

涼しい又いづれに山崎の童

夏天象

そとにまきこきしる風をうらりこぼし吹入るの涼也

夏地獄

くしんくしんはくもくもくきんきんきんきん禁所原一海やいんじ

夏雑物

かまらりあつ鐘とこゆい夏の暮のわくわくはげまのあぶ

水鶏

水鶏のくまの山崎の松林のこぼれまきまき

ゆらゆら浮たふきまきまきまきまきまきまきまきまき

水鶏行方

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

庭野麦

庭野のまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

離野麦

夕立の雨まきまきまきまきまきまきまきまきまき

雨庭野麦

えんや庭のこまきまきまきまきまきまきまきまき

久愛野麦

ふしり庭のまきまきまきまきまきまきまきまきまき

照射

いほの庭のまきまきまきまきまきまきまきまきまき

しをたしと蟬のしやうは風を涼しくするのたけ
水室

ふんふんく月をくわらん君のふんは涼しくするのたけ
をくわらん蟬のしやうは風を涼しくするのたけ
蚊を火

西のくわらん月をくわらん君のふんは涼しくするのたけ
溝蚊造火

水のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ
泉

松のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ

泉の夏栞

松のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ
納涼

松のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ
夕納涼

松のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ
樹陰納涼

松のたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ
麓納涼

涼しくするのたけはすくわらん君のふんは涼しくするのたけ

細涼糸

此乃山のわがや秋のん若は涼くもつた

松下納涼

年れし涼くは海より吹く風のやらの松木の

扇

うほほの月も風もささくささくささくささくささくささくささく

文の九多六月晦日つる流金

遠夕人立

涼くは風うほわくと暮しのやうに夕立夕立の由

夕立

夕立のうほほはとせれた夕立も名前の秋を志し涼く

夕立風

夕立風を吹ゆよ夕立涼くは夕立の夕立夕立夕立

夕立涼くは夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立

夕立

夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立

夕立

夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立

夕立

夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立夕立

早原主

凡そ修禊の秋とてその心もたのむに似し何れぞん

六月後

心修の風とてさしつた川も修禊の神とてさしつた

夏後

修禊の心とてさしつた川も修禊の神とてさしつた

秋と夏後

秋とてさしつた川も修禊の神とてさしつた

夏とてさしつた川も修禊の神とてさしつた



